

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集

うえ みや

# 上宮 第3遺跡

平成4年度上宮配水池建設事業に伴う埋蔵文化財  
発掘調査報告書

1993・3

宮崎県・西都市教育委員会

## 序

西都市には全国的に有名な特別史跡・西都原古墳群をはじめ茶臼原・三納・三財古墳群など現在650基余の古墳が点在し、また、奈良時代に置かれた日向国府（推定）や日向国分寺・同尼寺跡も保存され、さらに、市内の各所からは縄文時代や弥生時代の遺跡が発見されています。これらのことは、古くから政治・文化の中心地として栄えていたことを物語っており、古代史解明の重要な地位を占めています。

しかし、近年の諸開発によって失われていく遺跡も少なくなく、埋蔵文化財の保護行政を一層充実していかなければならない時期にきております。

本書は、市水道課の委託を受けて実施した、平成4年度上宮配水池建設工事に伴う発掘調査の結果報告であります。

調査の結果、三宅神社に関連があると思われる平安時代末期～中世期前半の溝状遺構をはじめ多量の土師器が混入された土坑が検出され、また、西都市でははじめての柱列（欄列）状遺構が検出されるなど、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、学術研究の資料としてだけでなく、郷土を理解するための資料として、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識が得られれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご協力いただいた市水道課をはじめ、発掘調査にたずさわっていた方々、並びに地元の方々に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月25日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

## 例　　言

1. 本書は、市水道課の上宮配水池建設事業に伴い、平成4年度に実施した上宮第3遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、市水道課の依頼を受けて、西都市教育委員会が実施した。
3. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体　　西都市教育委員会

教育長　　平野　平

社会教育課長　三輪　公洋

同文化財係長　伊達　博敏

調査員　　日高正晴（西都原古墳研究所長）

糞方政幾（社会教育課主事）

調査作業員　　篠原時江・黒木トシ子・緒方タケ子・長谷川クミエ

萩原秋子・佐伯民孝・杉田ヨシ・横山ヨシ

椎葉智佐子

椎葉重満

整理作業員　　福田頼子

4. 遺物の実測・トレース・図面の作成は福田・糞方が行った。
5. 本書の執筆はV・まとめを日高が担当し、その他の執筆及び編集は糞方が行った。
6. 本書に示す方位は磁北である。
7. 土層・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖による。
8. 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

## 本文目次

I.	調査に至る経緯	1
II.	遺跡の位置と歴史的環境	1
III.	調査の概要	2
IV.	遺構と遺物	9
	(1) 弥生時代の遺構と遺物	9
	(2) 古墳時代の遺構と遺物	11
	(3) 古墳時代以降の遺構と遺物	13
	(4) 時代不明の遺構	28
V.	まとめ	33

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	
第2図	基本土層図	3
第3図	遺跡周辺図	5~6
第4図	遺構分布図（アカホヤ火山灰層面）	7~8
第5図	住居跡実測図	9
第6図	住居跡出土遺物実測図	10
第7図	弥生土器実測図	10
第8図	出土遺物実測図・拓影（須恵器）	11
第9図	出土遺物実測図・拓影（須恵器）	12
第10図	1号土坑実測図	13
第11図	1号土坑出土遺物実測図	15
第12図	1号土坑出土遺物実測図	16
第13図	1号・2号土坑出土遺物実測図・拓影	17
第14図	2号土坑実測図	18
第15図	溝状遺構土層図	21

第16図	1号～3号溝状遺構出土遺物実測図・拓影	23
第17図	4号・5号溝状遺構出土遺物実測図	24
第18図	1号掘立柱建物跡実測図	25
第19図	2号掘立柱建物跡実測図	26
第20図	1号掘立柱建物跡出土遺物実測図	26
第21図	柱穴(ピット)出土遺物実測図・拓影	27
第22図	出土遺物実測図	28

### 表 目 次

表1	土師器観察表	29
----	--------	----

### 図 版 目 次

図版1	上宮第3遺跡近景・南側遺構分布状況・1号～3号土杭検出状況	37
図版2	1号～8号溝状遺構及び土層検出状況・北側遺構分布状況	38
図版3	9号・10号溝状遺構検出状況・弥生時代住居出土状況など	39
図版4	出土遺物	40
図版5	出土遺物	41
図版6	出土遺物	42
図版7	出土遺物	43



遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
1001	西都原古墳群	1011	上宮古墳	1021	童子丸遺跡
1002	清水西原古墳群	1012	上宮城跡	1022~102	上園古墳
1003	上ノ原遺跡	1013	三宅城跡	1025	石貫遺跡
1004	寺山遺跡	1014	諏訪遺跡	1026	原口遺跡
1005	清水遺跡	1015	酒元遺跡	1027	寺原遺跡
1006	下尾筋遺跡	1016	堂ヶ島遺跡	1028	丸山遺跡
1007	上尾筋遺跡	1017	寺崎遺跡	1029	西都原遺跡
1008	日向国分寺跡	1018	上妻遺跡	3001	松本塚古墳
1009	国分遺跡	1019	経塚	3002	松本遺跡
1010	上宮遺跡	1020	法元遺跡	3008	三納古墳群

第1図 遺跡位置図

## I. 調査に至る経緯

西都市水道課では、上宮地区の上水道改良に伴い配水池（P.Cタンク）を建設する計画がなされたが、建設地が西都原であることから西都原協議会で協議されることとなった。

それは、西都原の風致保存については、宮崎県知事・宮崎県教育長・西都市長・西都市教育長の4者で確認（確認書）されており、この確認書の第4項に「西都原に関して定期的に又は必要に応じて関係機関の協議会を開き意見の統一をはかる」とあり、西都原に関することについてはこの協議会（西都原協議会）の意見の統一によって進められていることから、行われたものである。

当初は西都原運動公園の北側に計画がなされたが、西都原運動公園の北側一帯は現在のところ開発が進んでいない地域であることから、建設地の変更をお願いし、再度協議することになった。

このようなことから、水道課では建設地を再度検討した結果、西都原運動公園の南側で、すでに開発が進んでいるところに計画変更がなされた。

これを西都原協議会で再協議の結果、同地はすでに開発が進んでいる地域でもあることから、周りに樹木を植栽しなるべく見えないようにすること、また、三宅神社の隣接地で周辺には古墳が点在する周知の埋蔵文化財包蔵地でもあることから事前調査が必要であるなどの意見の統一をみて、事業が実施されることになった。

調査は、担当課の水道課から依頼を西都市教育委員会が受け、建設地2,025m<sup>2</sup>全面の発掘調査を実施し、平成4年8月10日に着手、同年11月9日に終了した。

## II. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のほぼ中央部に位置する内陸都市で、地形としては西方に九州山地を背負った形容を表し、その九州山地から岬様に南東へ、東へと幾条にも台地が延びている。また、市街地を中心とする平野部の東端を南流する一つ瀬川及び支流の三財川・三納川等が沖積地を潤し、豊かな農地が形成されている。

本遺跡は、この幾条にも延びた台地のうち、西都平野に向かって南南東に延びた西都原台地南端に位置している。この西都原台地には全国的に周知される特別史跡・西都原古墳群（柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基）が群在し、中央部には特別史跡309基には含まれない男狹穗塚と女狹穗塚古墳（明治28年12月4日官内省陵墓参考地として治定）2基の巨大古墳が偉容を誇っている。男狹穗塚は全長217m・高さ18m、女狹穗塚は全長174m・高さ15mの九州随一の規模を誇る前方後円墳で、10.5haの静肅な照葉樹林に囲まれた森に保存されている。

ところで、本遺跡の東側に隣接して三宅神社が存在している。この三宅神社は平安時代末期には存在したと推定される神社で、しかも西都原台地上に立地し、天孫瓊々杵尊が祭神であることからも日向地方において崇拜厚い神社であったと思われます。古記録によると一年を通じて大・中・小の祭事が行われ、97回にも及んでいたことが記され、特に6月夏至の日の天孫降臨祭・8月15日の国家安穏祭・10月1日と11月初卯の日の山陵祭が同神社の三大祭とされていた。このなかで、山陵祭は西都原の男狹穂塚を対象にした祭事で、古くは可愛塚神社（現在可愛塚神社跡が男狹穂塚の基台上に残っている）で催されていたものであるが、現在でも西都原古墳祭として継承されている。

なお、三宅神社の北側に隣接して上宮遺跡が存在するが、同遺跡からは14条の溝状造構及び長方形土坑が確認されている。これらの遺構は、三宅神社に関連のあるものと推定され、神社域にも含まれていることからも注目される。

また、本遺跡の南西0.23<sup>km</sup>には上宮城跡、北北東0.38<sup>km</sup>には三宅城跡2つの中世の城跡が所在し、さらに、同台地南側中間台地には奈良時代に建立された一国一寺の日向国分寺跡等が保存されていることからも、本遺跡を含む周辺地域は歴史的にも価値の高いところである。

### III. 調査の概要

調査は対象地の全面が造成され、中央に配水池、その他はコンクリートで舗装されることから全面の発掘調査を実施した。

まず、簡単な試掘調査を行った結果、アカホヤ火山灰層が残存していたのが確認されたので、その結果をもとに重機により表土及び黒色土を剥ぎ、アカホヤ層面での本格的な調査を実施した。また、ほぼ東西南北に10m方のグリットを設定し、造構・遺物の確認を行った。

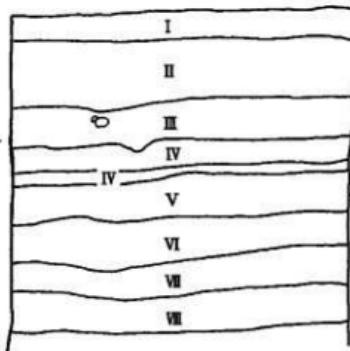
最後に、アカホヤ火山灰下層の縄文時代及び旧石器時代の文化層（造構・遺物）の確認のためのトレンチを各所に設定し調査を行ったが、アカホヤ火山灰層下層からは造構・遺物は検出されず、この時点で文化層はないものと判断し、調査を終了した。

調査の結果、最も古い時代の造構として弥生時代後期の住居跡1軒、そして、平安時代末期から近代までの溝状造構10条・土師器壺などが多量に出土した土坑など土坑10基、さらに、掘立柱建物跡2軒や柱列（欄列）状の造構を含む約850個ものピットが確認されました。

遺物は住居跡から弥生土器、1号土坑から多量の壺及び高台付碗などの土師器をはじめ県内では類例がない高台のついた鉢形の内黒土器、そして、溝状造構からはその時代を反映する土師器・須恵器・青磁などが出土しました。

これらの詳細については後述するとして、三宅神社に関連のあると推定される溝状造構や多量の土師器が出土した土坑が検出されたこと、また、西都でははじめての柱列（欄列）状造構などが検出されたことは大きな成果である。

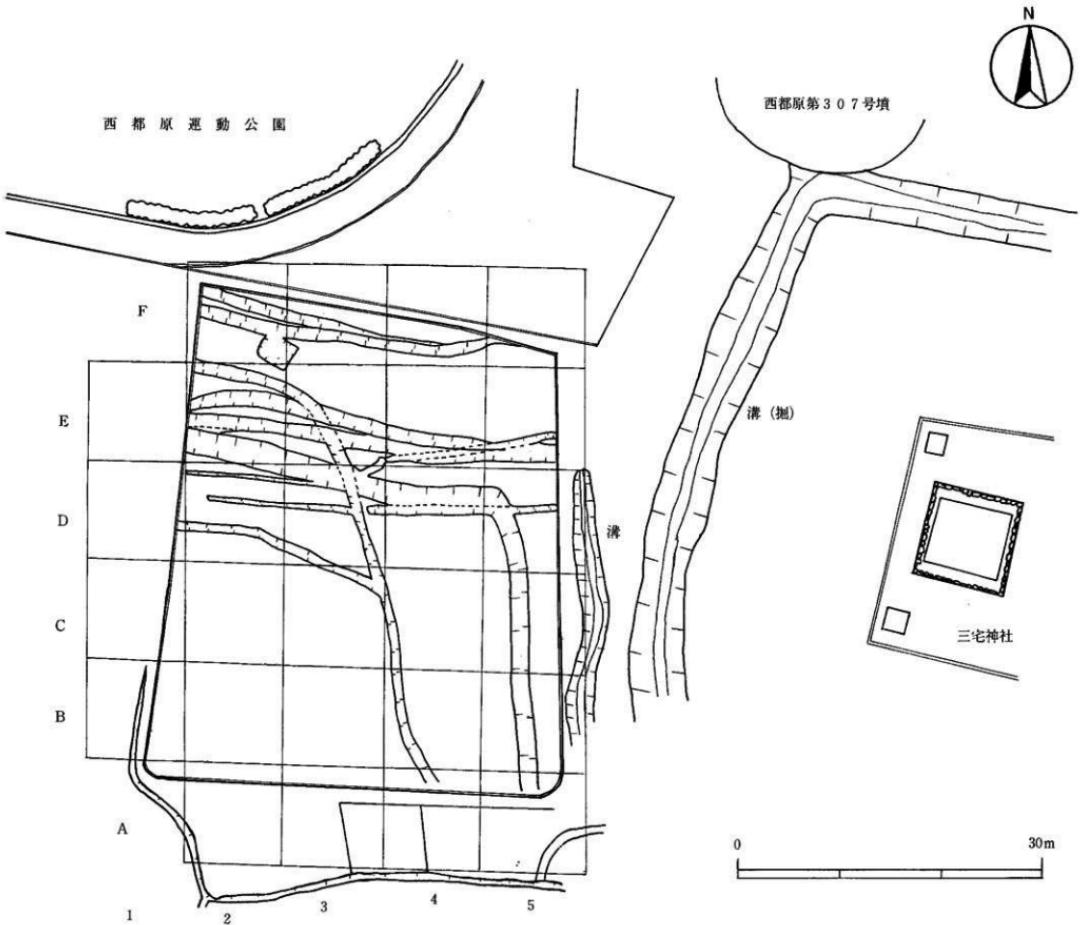
なお、本遺跡の基本土層は第Ⅰ層が表土（耕作土）、第Ⅱ層が腐食土、第Ⅲ層が黒色土、第Ⅳ層がアカホヤ火山灰層、第V層が黒褐色土、第VI層が暗褐色土、第VII層が褐色土、第VIII層が黄褐色土（第2オレンジ層）となっている。

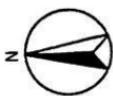


- I 表土（耕作土）
- II 腐食土
- III 黒色土
- IV 明黄褐色土 (Hue10YR6/6)  
アカホヤ火山灰層
- V 黑褐色土（黄褐色） (Hue10YR2/2)  
アカホヤ火山灰下層・粒子が荒い
- VI 黒褐色土 (Hue10YR2/2) やや硬質
- VI 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 硬質
- VII 褐色土 (Hue10YR4/4) 硬質
- VIII 黄褐色土 (Hue10YR5/6)  
赤色・黄色などのあらい粒子が多量混入

第2図 基本土層図







第4図 造構分布図

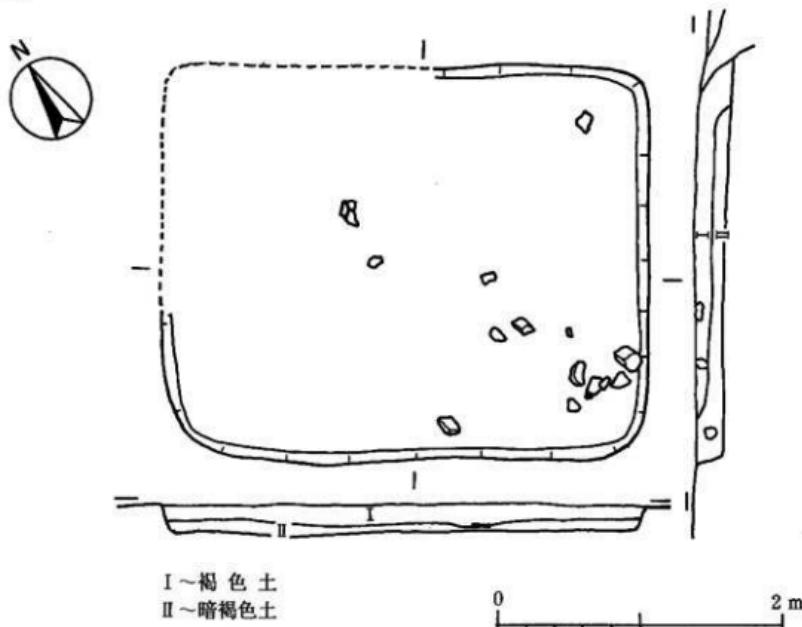
## IV. 遺構と遺物

### 1. 弥生時代の遺構と遺物

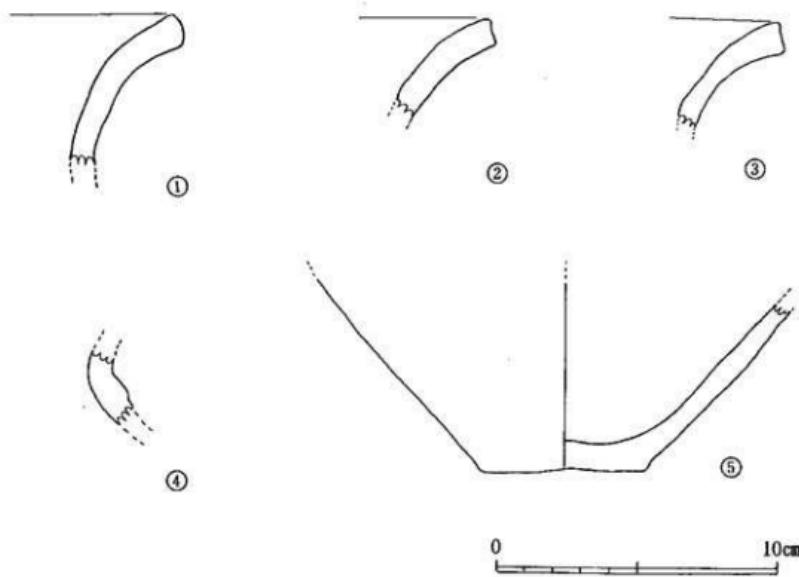
#### (1) 住居跡 (第5図・6図)

〈遺構〉 住居跡は調査地の北西部F-2グリットから1軒検出されている。方形状プランの竪穴式住居跡であるが、北西隅を7号溝状遺構と切り合っており、削平されている。長軸3.42m・短軸2.8mの規模を有する。床面は平坦的で、径が30cm前後・深さ15~51cmの円形柱穴が4個検出されているが、主柱は中央部位置する2本と思われる。壁面は約70度で立ち上がり、壁高は20cmを計る。

〈遺物〉 弥生土器約30点が出土しているが、そのほとんどが壺形土器である。1・2は口縁部が「く」字状に外反した壺形土器で、胎土はあらく、調整はヨコナデ調整である。3は口縁端部が水平を呈した壺形土器の口縁部、4は頸部に突帯を施した壺形土器で、胎土はあらく、調整はヨコナデ調整である。5は壺形土器の底部で、底径6.0cmを計る。胎土はあらう。



第5図 1号住居跡実測図

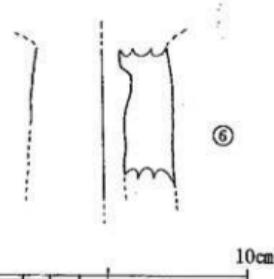


第6図 住居跡出土遺物実測図

#### その他の遺物

4号溝状遺構から高壺形土器の脚部が出土している。

脚部が垂直に延びるタイプのもので、胎土はあらく、へらで面取りした後ナデ調整が施されている。



第7図 弥生土器実測図

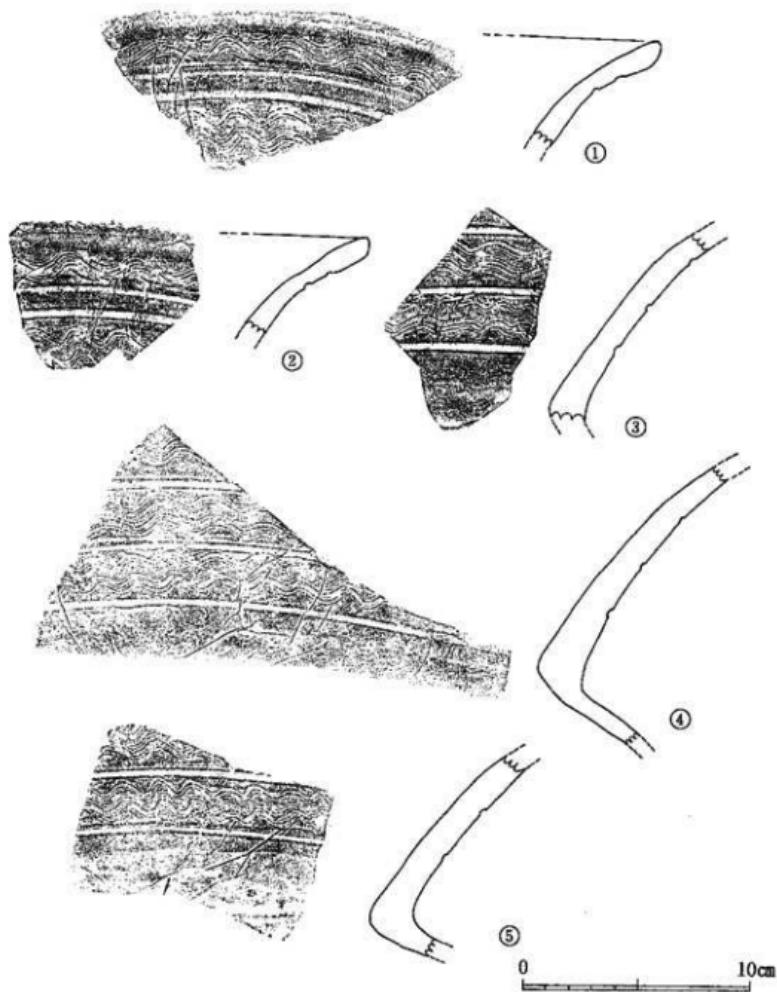
#### 2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に比定される須恵器が1号・2号・3号溝状遺構などから出土しているが、これらの溝状遺構は出土遺物から平安時代末期～中世期前半と推定されることから、同遺構に混入したものと思われる。しかし、隣接地には円墳が位置していることから、周辺地域に遺構の存在が想定される。

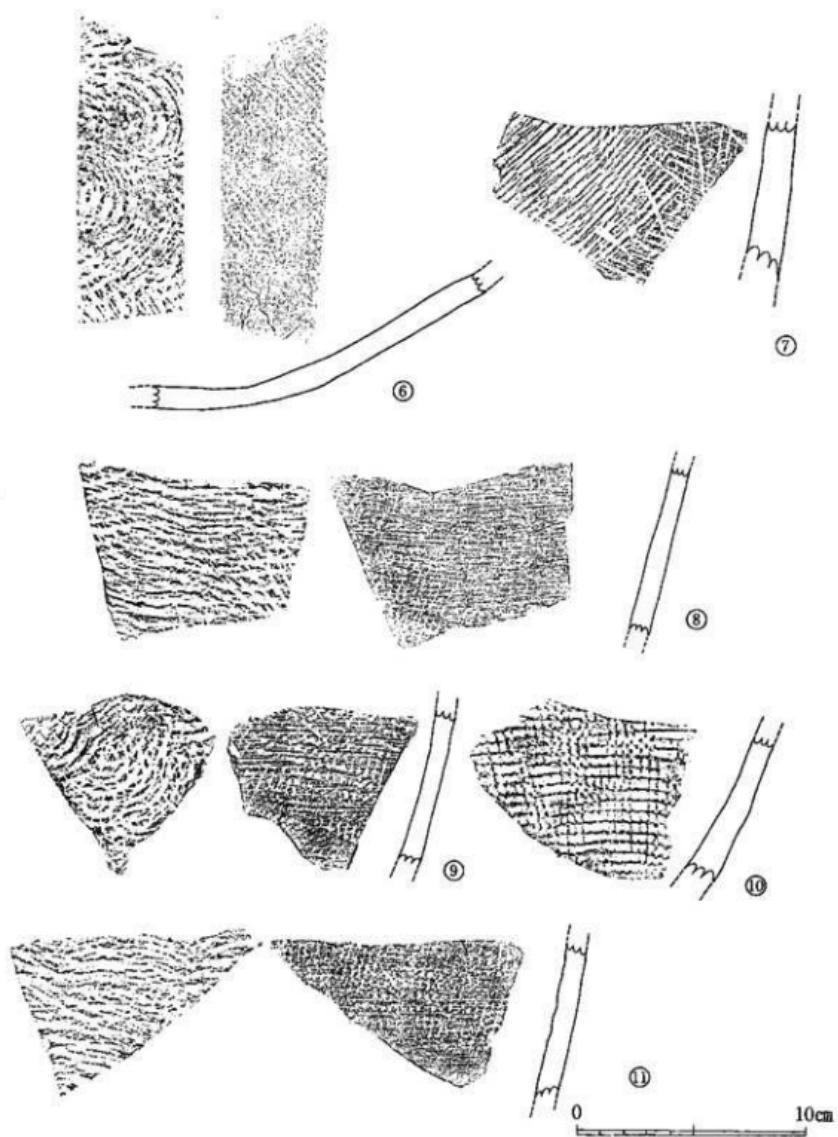
遺物は、口縁部に幾つかの凹線内を施し、その間に波状文が描かれた大型の壺形土器（1

～5）、外面格子目の叩き・内面同心円の青海波紋の叩きがほどこされたもの（6・9）などが出土している。なかでも、1・4・5は1号、3は3号、2は5号溝状遺構と出土地点は異なるものの、同一個体と思われる。

これらの遺物は特徵から須恵のIV b期、6世紀末～7世紀初頭に比定される。



第8図 出土遺物実測図・拓影（須恵器）



第9図 出土遺物実測図・拓影（須恵器）

### 3. 古墳時代遺構の遺構と遺物

#### (1) 土坑 (第4図・10図~14図)

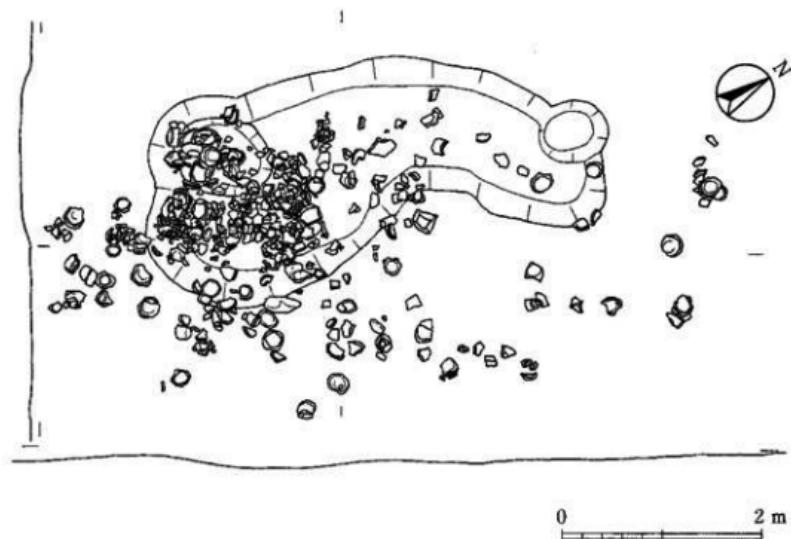
##### 1号土坑 (第10図~13図)

〈遺構〉 1号土坑は、南西部B-2-C-3グリットから検出されたもので、第II層の黒色土で多量の土師器片が出土することから確認された遺構である。プランは掘込みが浅く、わずかにアカホヤ火山灰層に床面が不整形に残存しているのみで判断が難しいが、遺物の出土状況から長方形あるいは橢円形と思われる。

遺物の出土範囲は長軸約6.9m・短軸約3.3mを計り、わりと大きな規模の土坑である。

〈遺物〉 出土遺物のほとんどが土師器で、しかもその90%以上が壊あるいは高台付碗の破片である。その個体は底部(底部片)を教えただけでも300点以上にもなり、その比率は9(壊):1(高台付碗)の割合である。

また、注目されるのは口縁部が内済し、長めの高台が付いた鉢形の内黒土器(32)が出土していることで、現在のところ県内には類例がないようである。内黒土器はもう2点完全に



第10図 1号土坑実測図

復元できないが、高台付碗（33・34）が出土している。

坏はすべてヘラ切り底で、底部及び法量によって、

A. 底部との境目に段を有するもの（1～6）

口縁部径9.5～10.5寸・器高2.5寸前後・底径4.5寸前後 —— A a (1)

タ · 器高3.7寸前後 · タ —— A b (2・3)

口縁部径12.0～13.0寸・器高3.7寸前後・底部5～6.5寸前後 —— A c (4・6)

B. 底部との境目がはっきりしているもの（7～16）

口縁部径9.5～10.5寸・器高3寸前後・底径5寸前後 —— B a (7)

タ · 器高4寸前後 · タ —— B b (8～10)

口縁部径10.5～11.5寸・器高4寸前後・底径6寸前後 —— B c (11・12)

口縁部径11.5～12.5寸・器高4.5寸前後・底径5寸前後 —— B d (13～16)

C. 底部との境目が丸みをおびてはっきりしないもの（17～22）

口縁部径10.5～11.5寸・器高3寸前後・底径5寸前後 —— C a (17・18)

口縁部径11.5～12.5寸・器高4寸前後・底径6寸前後 —— C b (19・20)

タ · 器高5寸前後 · タ —— C c (21)

に分類される。口縁部は外方向に直線的あるいは内湾ぎみに立ち上がっている。いずれもヨコナデ調整が施されている。

高台付碗も高台によって、

A. 2寸前後と長く、外方向にストレートぎみに延びるもの（23～25）

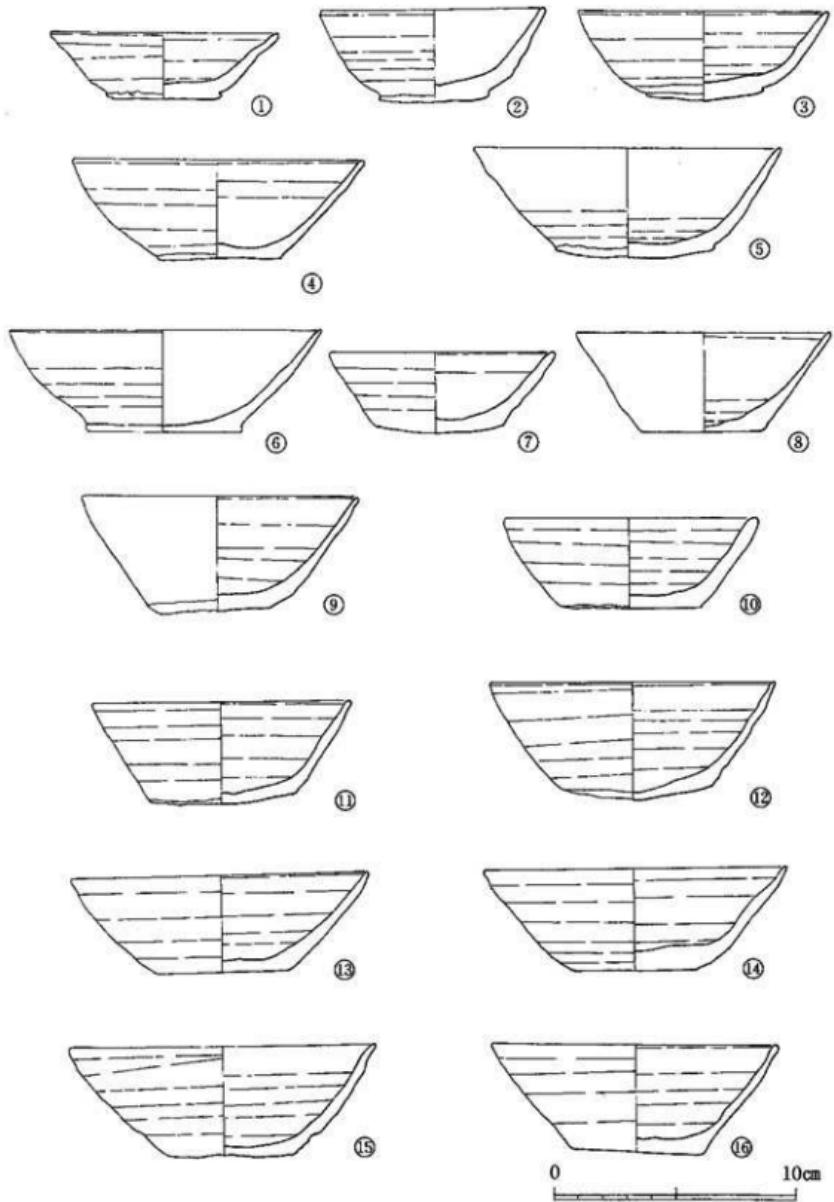
B. 外方向に短く、「く」字状に大きく外反するもの（26～28）

C. 外方向に短く、延びるもの（29～31）

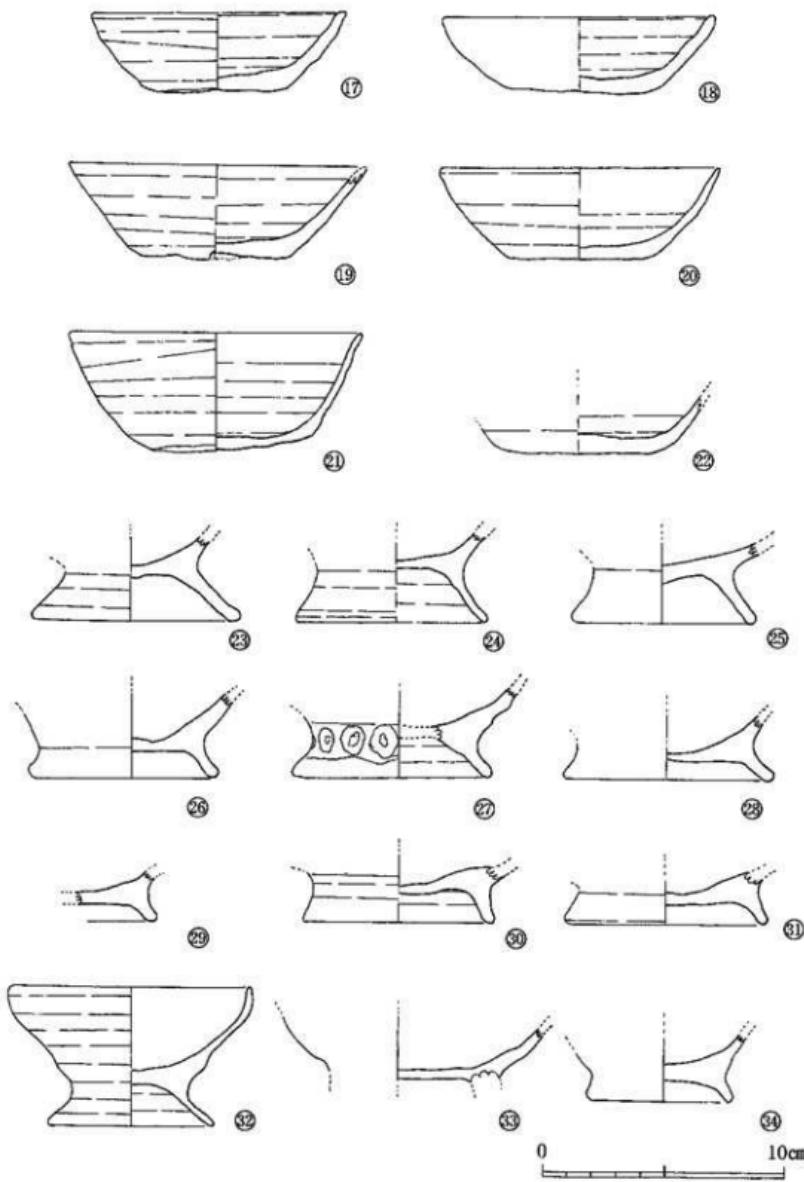
に分類される。高台端部は丸みをもち、いずれも坏と同様ヨコナデ調整が施されている。

その他、同土坑からは小型の高坏（35・36）が出土しているが、35は受部及び脚柱、36は据部で直線的に大きく広くタイプのものである。また、37は凸面に横方向の縄目、凹面には布痕を残す平瓦である。

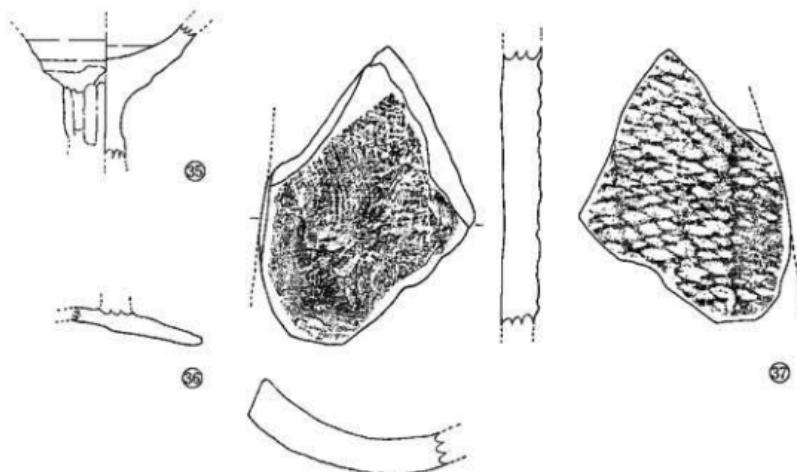
なお、これらのなかで土師器については、詳細な観察表を掲載したので参考にしていただきたい。



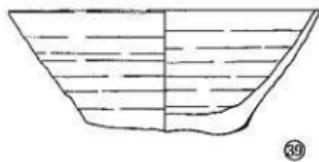
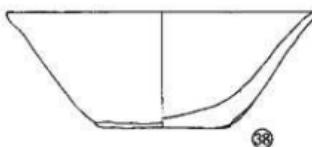
第11図 1号土坑出土遺物実測図



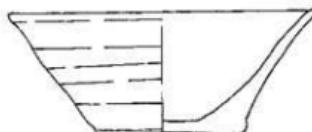
第12図 1号土坑出土遺物実測図



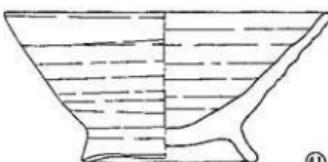
⑤～⑦ 1号土坑  
⑧～⑫ 2号土坑



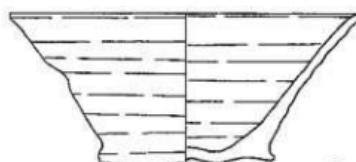
⑨



⑩



⑪



⑫

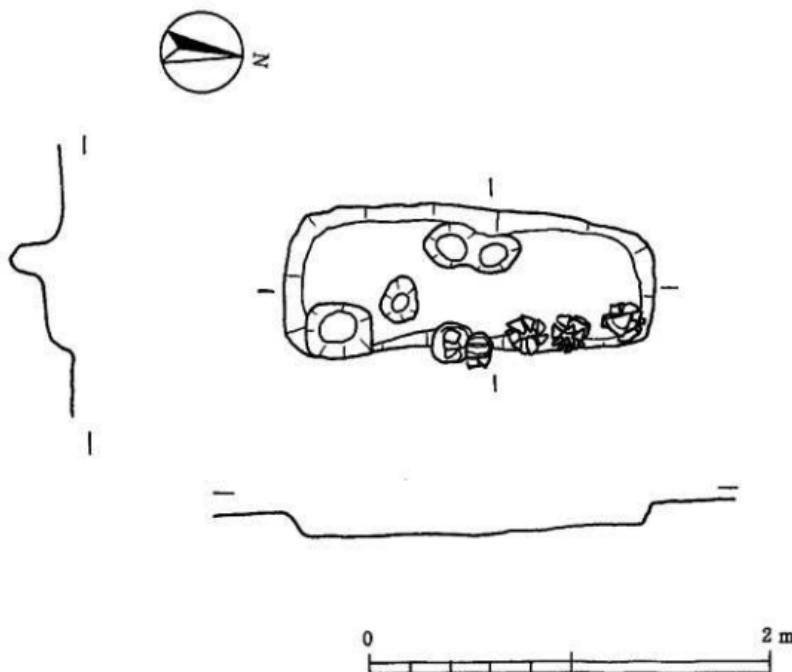
0 10cm

第13図 1号・2号土坑出土遺物実測図・拓影

## 2号土坑（第14図・15図）

〈遺構〉 調査地の南東部B-4グリットから検出された土坑で、隅丸の長方形プランを呈している。長軸1.83m・短軸0.7mの規模を有し、床面は平坦的で、壁面は約60度で立ち上がり、壁高は浅く0.11mを計る。円形ピットが4個掘り込まれているが、同遺構に関連するものではないと思われる。

〈遺物〉 土坑の北東、長軸側に1列に並んで出土している。いずれも完形になりうるもので、壺3点・碗2点の計5点である。壺は底部からいくとA（38）とBタイプ（39・40）が含まれるが、器高が高く、口縁部も外反しており、全体的なタイプとしては異なる。また、高台付碗（41）も高台端部が平坦で、1号土坑のものとはタイプが異なる。さらに、底部が斜め下方向へ強く張りだした碗（42）も出土している。



第14図 2号土坑実測図

### 3号土坑（第4図）

〈造構〉 調査地の東部C-5～D-5グリット、2号溝状造構に隣接して検出された土坑で、隅丸の長方形プランを呈している。長軸2.0m・短軸1.4m、床面は平坦的ではあるが傾斜している。壁面は約75度で立ち上がり、壁高0.44mを計る。

遺物は出土していない。

### 4号土坑（第4図）

〈造構〉 C-5グリット、2号溝状造構の東に隣接して検出された土坑で、楕円形プランを呈している。長軸2.0m・短軸1.4m、深さ0.33mを計る。

遺物は出土していない。

### 5号土坑（第4図）

〈造構〉 C-3グリット、1号溝状造構の西に隣接して検出された土坑で、楕円形プランを呈している。長軸1.6m・短軸1.0m、深さ0.32mを計る。

遺物は出土していない。

### 6号～8号土坑（第4図）

〈造構〉 これら3基の土坑は、調査地の南西部B-2グリットに並行して位置している。6号・7号土坑は長方形プランを呈し、6号土坑は長軸1.76m・短軸1.3m、深さ0.35m、7号土坑は長軸1.8m・短軸1.4m、深さ0.35mを計る。8号土坑は楕円形プランのもので、長軸1.75m・短軸1.4m、深さ0.35mを計る。

いずれの土坑からも遺物は出土していない。

### 9号土坑（第4図）

〈造構〉 調査地の北東部E-4～F-4グリット、7号溝状造構の南に隣接して検出された土坑で、楕円形プランを呈している。長軸1.5m・短軸1.05m、深さ0.1mを計る。

遺物は出土していない。

### 10号土坑（第4図）

〈造構〉 調査地の北西部F-2グリット、7号溝状造構と切り合って検出された土坑で、北側半分程が削平されている。円形プランと推定される。径1.7m・深さ0.2mを計る。

遺物は出土していない。

## (2) 溝状遺構 (第4図・16図・17図)

### 1号溝状遺構 (第16図)

〈遺構〉 調査地の南中央部からわずかに蛇行しながら北へ延び、中央部で屈曲して西に延びている溝状遺構である。ほとんどの溝状遺構が東西に延びているため、中央部では2号・4号・5号・6号溝状遺構と切り合っている。また、途中から二股に別れて西に延びている。現存長52.0cm・幅0.7~1.2m・深さ0.2~0.3mを計る。

〈遺物〉 1号溝状機構からは須恵器 (第8図1・4~6)・土師器・瓦器・陶磁器などが出士している。全体的には土師器と須恵器が多く、土師器が60%・須恵器が35%以上を占める。

土師器は完全に復元できうるものはないが、坏ではA~Cタイプ (1・2-Ac, 3・4-Bc, 5・6-Ca, 7-Cb?)、高坏ではAタイプ (8)・Bタイプ (9・10) のCタイプ (11) のものが出土しており、これらがほとんどを占める。12は口縁推定径21cm・器高7.3cm・底推定径7cmを計る鉢形の瓦器で、灰白色を呈している。13は短く端部が平坦な高台が付いた鉢形の陶磁器で、底径6.3cm・緑灰色を呈している。

### 2号溝状遺構 (第16図)

〈遺構〉 調査地の南東端から直線的に北に延び、中央部で110度の角度で西に延びている溝状遺構である。東部で3号・中央部で2号・西部で4号溝状遺構と切り合っている。溝状遺構のなかでは最大のもので、現存長62.0cm・幅1.7~2.6m・深さ0.27~0.37mを計る。

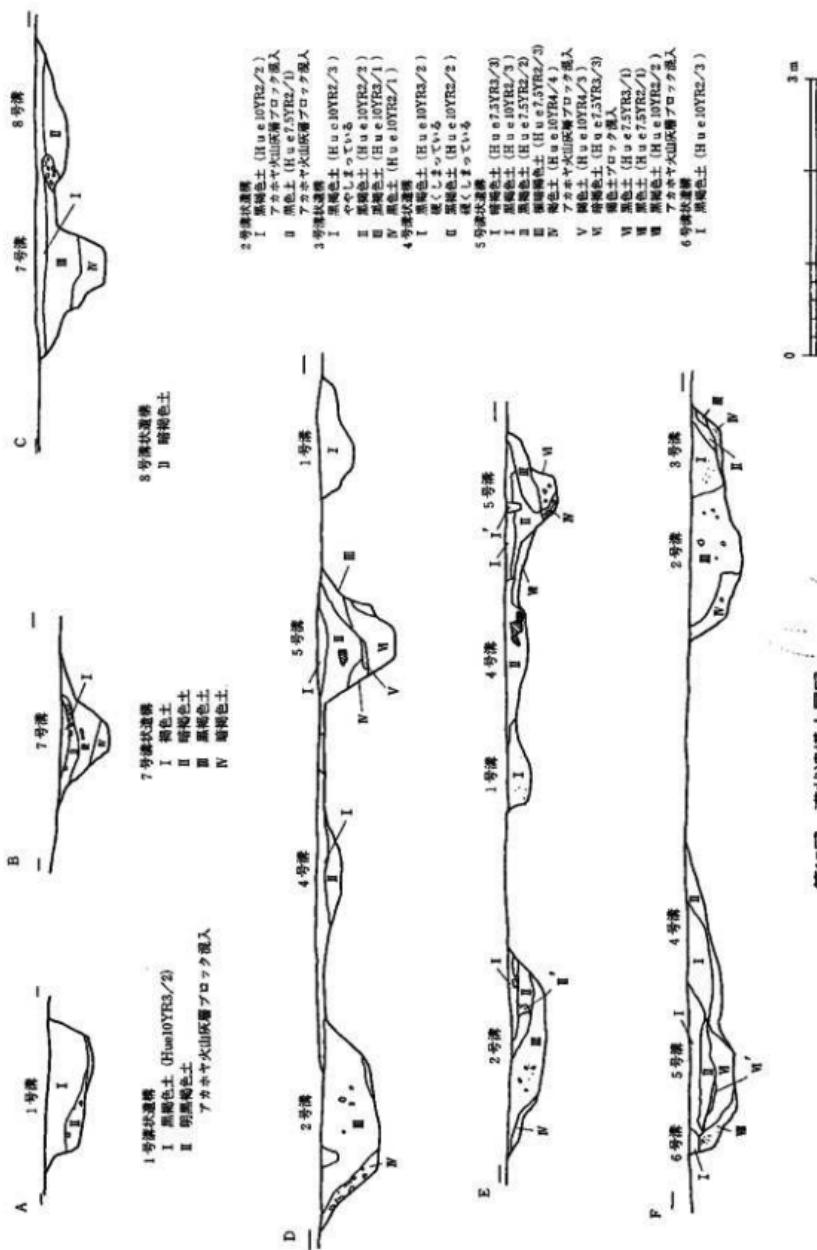
〈遺物〉 遺物は須恵器 (第9図7・10)・土師器・青磁の約30点が出土している。土師器は小片でタイプの判断は難しいが、坏はCタイプのものが含まれているようである。14はBタイプの高台付碗、15は鉢形 (浅丸形) の青磁で、明緑灰色を呈している。

### 3号溝状遺構 (第16図)

〈遺構〉 調査地の東中央部から東西に延びている溝状遺構で、2号溝状遺構と切り合っている。現存長19.2cm・幅0.6~0.8m・深さ0.16~0.22mを計る。また、東端には堰と想定される遺構が存在する。

〈遺物〉 遺物は須恵器 (第8図3・9図8)・土師器が少量出土している。17は小甕 (錢甕形) の須恵器で、上げ底の推定径12cmを計る。16は糸切り底の皿で、上げ底ざみである。糸切り底の土器は、本遺跡ではこれを含めてわずかに3点出土しているのみである。

### 4号・5号溝状遺構 (第17図)



第15図 滝状過積土層図

〈遺構〉 3号溝状遺構の北、ともに東西に延びている溝状遺構である。中央部から東は重複している。また、西部端で1号溝状遺構（4号）、東部で6号溝状遺構（4号・5号）と切り合っている。

4号溝状遺構は現存長18.3m・幅1.2~1.6m・深さ0.2m前後、中央部から東部にかけて幅約40cm範囲で礫が集石（配石）されている。5号溝状遺構は現存長18.3m・幅1.2~1.6m・深さ0.43~0.73m、中央部付近を中心に礫が散布している。

〈遺物〉 4号溝状遺構からは須恵器（第9図11）・土師器・陶器の約50点が出土している。19はAタイプの壺であるが、底径は大きく7cmを計る。18はCタイプの壺である。20は常滑系の大壺の口縁部で、口唇部は折り返され丸みをもっている。器厚はあつく、灰オリーブ色を呈している。21~23は浅半球形の小碗で、21は自然釉がかかり緑色、22・23は灰白色を呈している。

5号溝状遺構からは須恵器（第8図2・9図9）・土師器の約20点が出土しているが、土師器のほとんどはCタイプ（24~26）の高台付碗と思われる。

#### 6号溝状遺構

〈遺構〉 調査地の北東部端から斜め下方向（西南西）に延びている溝状遺構であるが、そのほとんどが4号・5号溝状遺構と重複している。現存長17.5m・幅0.6m前後・深さは浅く0.06mを計る。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

#### 7号溝状遺構（第4図）

〈遺構〉 調査地の北側、北東端から西に延びている溝状遺構で、中央部で8号溝状遺構・西部で弥生時代の竪穴式住居跡と切り合っている。現存長34.0m・幅0.9~1.5m・深さ0.3~0.56mを計る。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

#### 8号溝状遺構（第4図）

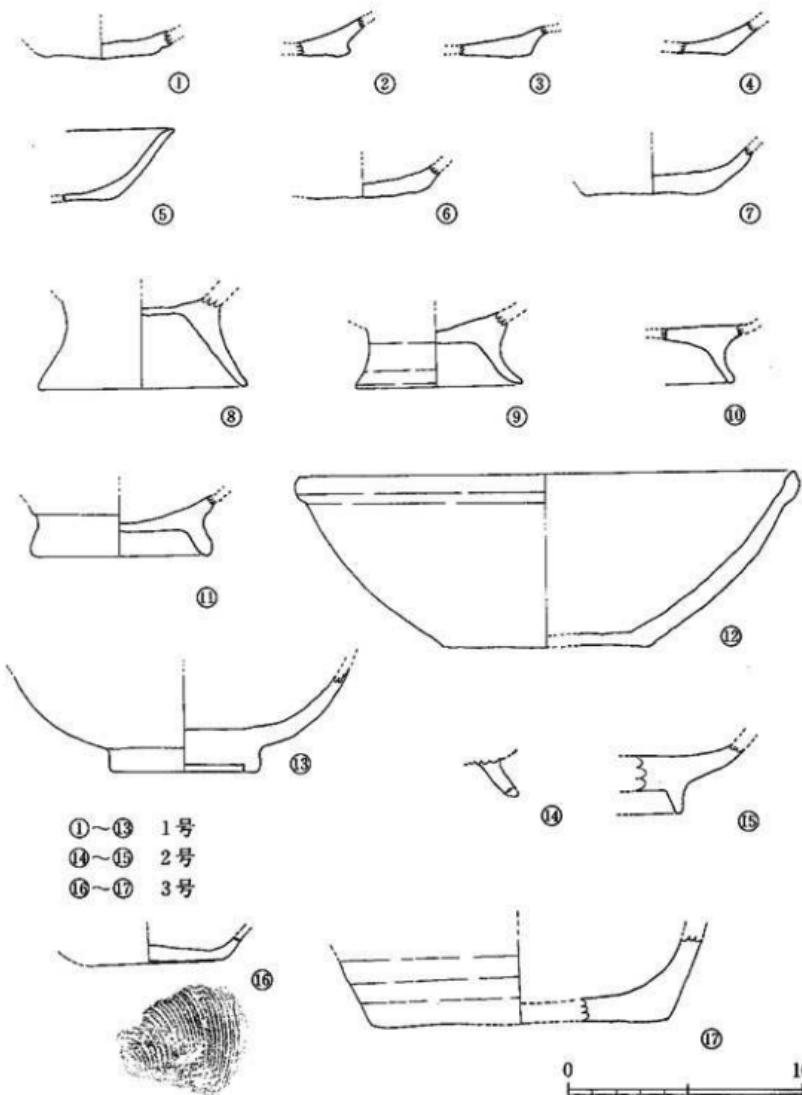
〈遺構〉 7号溝状遺構と重複あるいは並行しながら西に延びている溝状遺構で、現存長25.0m・幅0.95~1.15m・深さ0.14~0.2mを計る。

〈遺物〉 遺物は他溝状遺構と同様の須恵器の小片が出土しているが、器形などは判断がつきにくい。

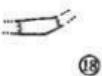
#### 9号・10号溝状遺構（第4図）

〈遺構〉 調査地の中央部から並行して西に延びている小さな溝状遺構で、9号溝状遺構は現存長13.9m・幅0.5m前後・深さ0.1m前後を計る。10号溝状遺構は現存長14.9m・幅0.5m前後・深さ0.1m前後を計る。

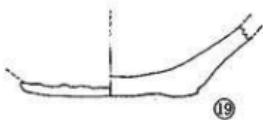
〈遺物〉 遺物は出土していない。



第16図 1号～3号溝状遺構出土遺物実測図・拓影



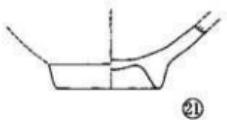
⑯



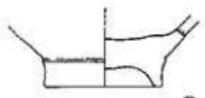
⑰



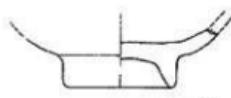
⑱



⑲



⑳



㉑

⑯～㉑ 4号

㉒～㉓ 5号



㉔



㉕



㉖



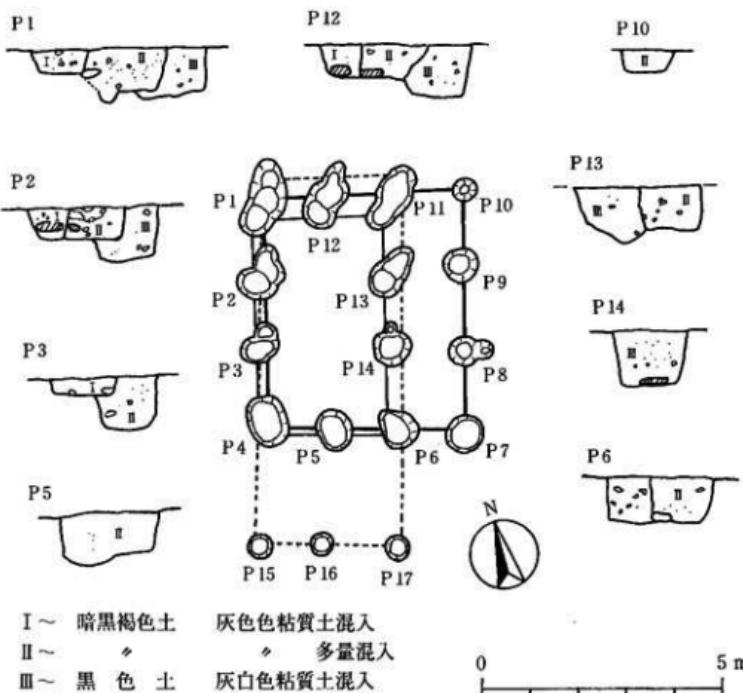
第17図 4号・5号溝状遺構出土遺物実測図

(3) 掘立柱建物跡 (第18~20図)

1号掘立柱建物跡 (第18図・20図)

〈遺構〉 1号溝状遺構と2号溝状遺構に狭まれたC-4グリットから検出されたものである。柱穴の形状及び埋土状況から3回建て替えられているよう、その際1回は東側に増築されている。また、これらの柱穴と並行して南側に3個存在するが、これが同建物跡に関連した柱穴であれば、2回増築されたことになる。主軸の方向はN-16°-E、柱穴はすべて円形で、柱間1.5~2.5m、深さ0.14~0.45mを計る。

〈遺物〉 土師器がほとんどで、わずかにP3とP13から須恵器が出土している。須恵器は他遺構同様IV b期の壺(壺)形土器で、土師器はA~Cタイプ(1~5)の坏が出土しているが、5はCタイプではあるものの底径6.5cmを計る皿に近い形の坏である。また、Cタイプの高台付碗で、表面黒色を呈した黒色土器(6)が1点のみ出土している。



第18図 1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

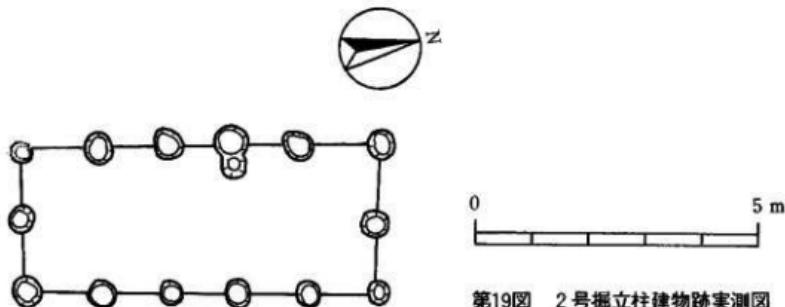
2号掘立柱建物跡（第19図）

〈造構〉 1号溝状造構の南、B-4 グリットから検出されたもので、1号溝状造構と隣接している。

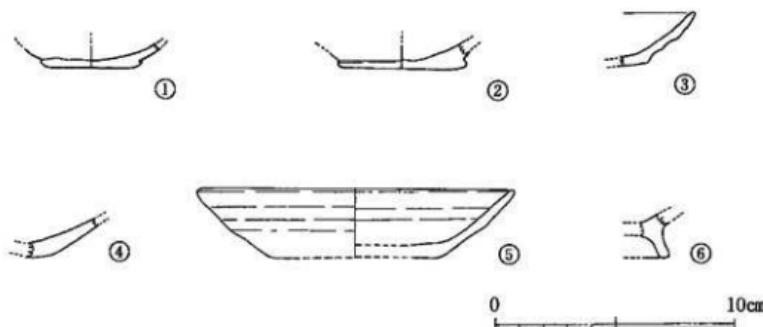
2間×5間のもので、主軸N-15°-E、桁行（NS）2.6m・梁間（EW）6.2mを計る。

柱穴はすべて円形で、柱間 1.2m前後、深さ21cm～49cmを計る。

〈遺物〉 遺物は出土していない。



第19図 2号掘立柱建物跡実測図

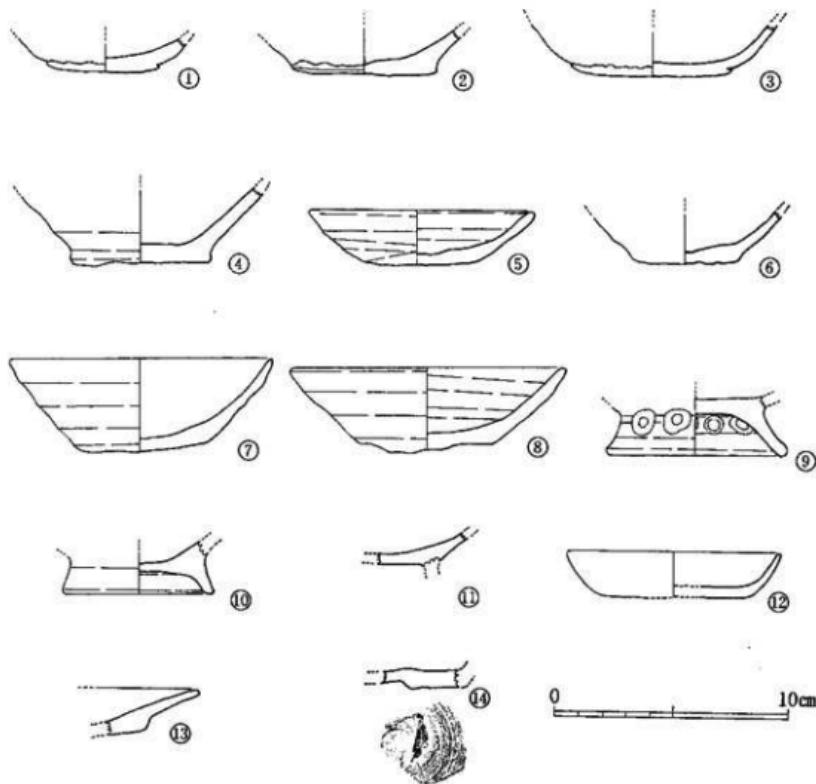


第20図 1号掘立柱建物跡出土物実測図

#### (4) 柱穴（ピット）

《遺構》 調査地全面に約850個検出されている。いずれにしても狭範囲にこれだけの数が検出されており、何回となく同場所に掘立柱建物が建てられたことを表していることから、より複雑な柱穴群となっている。また、出土遺物も限られていることから、時代的なことなど判断が難しく、不明な点が多い。

《遺物》 遺物は土師器がほとんどで約200点、わずかに須恵器が含まれている。土師器は壊が多くA～Cタイプものが含まれているが、小片が多く細かい器形の判断が難しい。



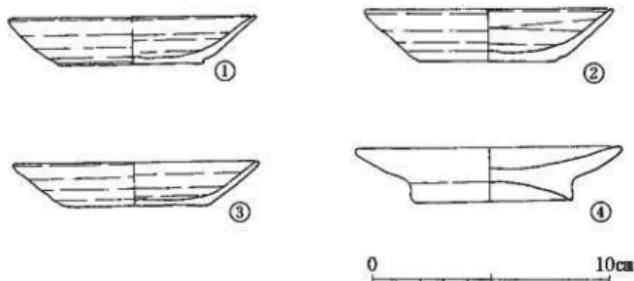
第21図 柱穴（ピット）出土遺物実測図・拓影

壺はA～Cタイプ（1～8）のものが含まれ、高台付碗は、量的に少なく、Bタイプ（9）とCタイプ（10）のものが含まれている。また、高台付碗ではBタイプと思われる内黒土器（11）も出土している。

その他、量的には圧倒的に少ない皿（12・13）や糸切り底の壺（14）が出土している。12は底部との境目がはっきりしない、13は段をもつ小皿の土師器である。

#### （5）その他の遺物（第22図）

B-2グリットで、1号溝状遺構に接したわずかな窪みから、本遺跡では貴重な小皿が3枚並んで出土している。薄手の小皿（1～3）で、底部との境目がはっきりしている。また、その北部、C-3グリットのわずかな窪みからは高台付の小皿が出土している。厚手で、高台は下方向に延び、高台端部は尖りぎみのものである。本遺跡からは類似品はみあたらない。



第22図 出土遺物実測図

#### 4. 時代不明の遺構

##### 柱列（櫛列状）遺構（第4図）

調査地の北部、7号溝状遺構と5号溝状遺構との間を中心にして、東西に4列並行して延びている。いずれも円形で、径40㌢前後（径25㌢～55㌢）が多く、深さは浅く20前後を計る。埋土も他柱穴は黒色あるいは黒褐色なのにに対し、灰褐色を呈している。

遺物は出土しておらず、時代的なことなど判断に苦しむが、埋土及び検出状況などから中世以降の遺構と推定される。また、使用目的についても、昔時三宅神社の寺域でもあったことから、三宅神社に関連した遺構とも思われるが、不明な点が多く判断が難しい。

表 1 土師器類目録

図面番号	物種名	器種名	部位	外観		内観		口縁部径		底面		法量		色調		地土		備考	
				ヨコナナデ	ヨコナナデ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
第1図 1	18式	环	縫合	"	"	"	"	5.5(底)	2.8	4.5	良好	緑色	7.5TR/6	CAE	7.5TR/4	2種の強度・適切	"	"	
"	2	"	"	"	"	"	"	"	2.8	4.6	"	良好	緑色	5TR/4	CAE	5TR/4	"	"	
"	3	"	"	"	"	"	"	10.2(底)	3.7	4.8	"	良好	7.5TR/6	緑色	7.5TR/4	2種の強度	"	"	
"	4	"	"	"	"	"	"	12.0(底)	4.1	5.0	"	良好	7.5TR/4	CAE	7.5TR/4	3種の強度	スリット付	"	
"	5	"	"	"	"	"	"	12.7(底)	4.5	6.5	やや不良	緑色	7.5TR/4	CAE	7.5TR/4	2種の強度	底部の強化著しい	"	
"	6	"	"	"	"	"	"	13.0(底)	4.2	6.4	良好	良好	5TR/6	緑色	5TR/6	"	風化	"	
"	7	"	"	"	"	"	"	"	9.4	3.4	5.4	やや不良	緑色	7.5TR/6	緑色	7.5TR/4	3-5種の強度	底部の風化著しい	"
"	8	"	"	"	"	"	"	10.5(底)	4.1	5.1	"	良好	5TR/3	CAE	5TR/4	2種の強度	風化著しい	"	
"	9	"	"	"	"	"	"	"	11.5	4.9	4.6	良好	緑色	7.5TR/4	緑色	7.5TR/4	2種の強度	底面の削り落著しい	"
"	10	"	"	45度	ヨコナナデ	"	"	10.5	3.7	5.8	"	良好	5TR/4	緑色	5TR/3	3-5種の強度	スリット付・無い仕上げ	"	
"	11	"	"	縫合	ヨコナナデ	"	"	10.0(底)	4.2	6.1	"	良好	5TR/3	緑色	5TR/3	"	"	"	
"	12	"	"	"	"	"	"	11.8(底)	4.9	6.2	"	良好	5TR/2	緑色	5TR/2	2種の強度	"	"	
"	13	"	"	"	"	"	"	12.3(底)	2.6	5.6	"	良好	7.5TR/2	緑色	7.5TR/2	2種の強度	荒い仕上げ	"	
"	14	"	"	"	"	"	"	12.5(底)	4.2	5.0	"	良好	7.5TR/4	CAE	7.5TR/4	2種の強度	スリット付	"	
"	15	"	"	"	"	"	"	12.1(底)	4.6	5.3	"	良好	10TR/2	CAE	10TR/2	2種の強度	スリット付・無い仕上げ	"	
"	16	"	"	33.5×9.5	"	"	"	11.9	4.6	5.3	"	良好	7.5TR/3	緑色	7.5TR/2	3-5種の強度	荒い仕上げ	"	
"	17	"	"	"	"	"	"	10.5(底)	3.3	5.3	"	やや不良	良好	7.5TR/3	緑色	7.5TR/3	2種の強度	スリット付	"
"	18	"	"	"	"	"	"	"	11.4	3.2	5.3	良好	5TR/6	緑色	5TR/6	"	スリット・風化著しい	"	
"	19	"	"	縫合	ヨコナナデ	"	"	"	"	6.0	良好	緑色	7.5TR/4	緑色	7.5TR/4	"	スリット付	"	
"	20	"	"	縫合	ヨコナナデ	"	"	11.1(底)	3.8	5.6	"	良好	7.5TR/3	CAE	7.5TR/3	"	スリット・風化	"	
"	21	"	"	"	"	"	"	12.1(底)	5.0	6.6	やや不良	緑色	10TR/4	緑色	10TR/4	"	風化著しい	"	
"	22	"	"	縫合	ヨコナナデ	"	"	"	"	6.3	"	良好	7.5TR/3	緑色	7.5TR/3	"	スリット・風化著しい	"	
"	23	"	縫合	高台	"	"	"	"	"	8.7	"	良好	7.5TR/4	緑色	7.5TR/6	"	スリット・風化著しい	"	

図面番号	測定部位	測量法				地質	外観	内観	胎土	備考	
		外	内	面	面						
第2図 2.4	尾端 輪脚 高台	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	8.1	良好	5TR7/4	5TR7/4	2級耐候性	
" 2.5	" "	" "	" "	" "	" "	7.6	"	継続 7.5TR7/3	継続 7.5TR8/3	"	
" 2.6	" "	腰-抬	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	7.9	やや不良	5TR7/6	継続 5TR8/4	風化著しい	
" 2.7	" "	腰-抬	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	8.4	良好	継続 7.5TR7/4	継続 5TR8/4	指明正確あり	
" 2.8	" "	高台	" "	" "	" "	9.8	"	継続 7.5TR7/4	継続 7.5TR8/3	2級耐候性	
" 2.9	" "	" "	" "	" "	" "	"	"	CA地 7.5TR7/4	CA地 7.5TR7/4	3級耐候性	
" 3.0	" "	" "	" "	" "	" "	8.0	"	良 5TR7/6	良 5TR8/6	"	
" 3.1	" "	" "	" "	" "	" "	8.5	"	継続 7.5TR7/4	継続 7.5TR8/4	3級耐候性	
" 3.2	" "	腰-脚	" "	ヘチ脚	ヘチ脚	9.8	5.8 (6.8)	"	CA地 7.5TR7/3	良 7.5TR7/1	"
" 3.3	" "	肩部	" "	ヨコナデ	ヨコナデ	"	"	良 5TR8/6	良 7.5TR7/1	"	
" 3.4	" "	腰-抬	" "	" "	" "	"	"	良 5TR7/6	良 7.5TR7/1	"	
第3図 3.5	尾端 腰-脚 ヨコナデ(ハサ形)	"	"	"	"	"	"	CA地 5TR7/4	CA地 5TR7/4	2級耐候性	
" 3.6	" "	肩部	"	ヘチ脚	ヘチ脚	"	"	良 5TR7/6	良 5TR7/6	無仕上げ	
" 3.8	2.5点 腰-脚	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	12.7(13)	4.8	5.5	"	表裏風化著しい	
" 3.9	" "	輪脚	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	13.0	5.1	6.0	CA地 5TR8/3	"	
" 4.0	" "	腰-脚 ヨコナデ(ハサ形)	"	"	"	12.8	5.3	6.0	CA地 7.5TR7/3	CA地 7.5TR7/3	
" 4.1	" "	輪脚	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	13.4(13)	6.3	7.4	CA地 7.5TR7/1	CA地 7.5TR7/3	
" 4.2	" "	脚	輪脚	輪脚	輪脚	14.9	6.5	6.9	CA地 5TR7/2	CA地 5TR8/3	
第4図 1	1輪脚 腰-脚 高台	"	"	"	"	4.8	やや不良	継続 7.5TR7/6	継続 7.5TR8/6	風化著しい	
" 2	" "	" "	"	"	"	"	"	良 5TR7/1	良 7.5TR8/4	"	
" 3	" "	腰-脚	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	"	"	良 5TR7/5	良 7.5TR7/4	"	
" 4	" "	肩部	ヘチ脚	ヘチ脚	ヘチ脚	"	"	継続 7.5TR7/3	継続 7.5TR8/3	"	
" 5	" "	腰-脚	"	"	"	4.5(4)	"	継続 7.5TR8/4	継続 7.5TR8/4	風化著しい	

図面番号	通称名	器種	部位	調査		法線		地質		地土		備考	
				外観	内面	直視部	横視部	外観	内面	地質			
第16回	6 1號機 飛輪	飞輪	底板			5.8	やや不良 きさき	5TR7/6	鉄地 7.5TR7/6	2層構造	腐化著しい		
"	7 "	"	"	"	"	5.5	"	AMG 7.5TR8/4	鉄地 7.5TR8/6	3層構造	"	"	
"	8 "	"	高台			8.9	"	良至 7.5TR7/6	鉄地 7.5TR7/4	2層構造	"	"	
"	9 "	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	7.1	良好	鉄地 7.5TR8/3	鉄地 7.5TR8/3	2層構造	風化		
"	10 "	"	"	"	"	"	"	STK7/8	鉄地 7.5TR8/6	"	腐化著しい		
"	11 "	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	7.8(8)	"	良至 7.5TR7/4	鉄地 7.5TR7/4	"	腐化著しい		
"	14 2號機 飛輪	飞輪	部			"	"	STK7/6	良至 5TR8/6	3層構造	"	"	
"	16 3號機 小亞底 部	ヨコナデ	ヨコナデ			5.4(E)	"	良至 7.5TR7/4	良至 7.5TR8/6	2層構造	糸切り端		
第17回	18 4號機 25 路盤	路盤	"	"	"	"	"	良至 7.5TR8/6	鉄地 7.5TR7/4	"	"		
"	19 "	"	路盤	"	"	7.4	"	良至 7.5TR7/4	鉄地 7.5TR7/4	"	逐段積重仕上げ		
"	24 5號機 飛輪	飞輪	部	"	"	"	"	STK8/6	良至 5TR8/6	"	"		
"	25 "	"	斜 部			"	やや不良	鉄地 7.5TR8/4	鉄地 7.5TR8/6	"	腐化著しい		
"	26 "	"	高台			"	"	STK7/6	良至 5TR7/6	"	"		
第20回	1 1號機 环	環	底板			4.0	"	良至 5TR7/6	良至 5TR7/6	"	腐化著しい		
"	2 "	"	"	"	"	5.4	"	AMG 7.5TR8/6	良至 5TR7/6	"	"	"	
"	3 "	"	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ巻き	1.1	良好	良至 7.5TR7/4	鉄地 7.5TR7/4	"	"		
"	4 "	"	斜板	"	"	"	"	良至 5TR7/4	鉄地 5TR7/4	"	"		
"	5 "	"	環	"	"	5.8(8)	2.9	"	良至 5TR7/4	鉄地 5TR7/4	"	"	
"	6 "	"	斜板	高台	"	"	"	良至 10TR7/1	鉄地 10TR7/1	"	内側(黒色)土器		
第21回	1 柱穴	柱穴	环	底板	"	ヨコナデ	4.8	良好	7.5TR8/4	鉄地 7.5TR8/4	"	・環地人	
"	2 "	"	斜板	"	"	"	"	良至 7.5TR8/4	良至 7.5TR8/6	"	スズ代物		
"	3 "	"	"	"	"	"	"	良至 7.5TR8/4	鉄地 7.5TR8/4	2層構造	荒い仕上げ		
"	4 "	"	"	"	"	"	"	良至 7.5TR8/4	鉄地 7.5TR8/3	2層構造	腐化著しい		

図面番号	機物番号	部位名	面積単位	内面		外側		内面		外側		地 質 考 察	
				外 面	内 面	面積	形状	面積	形状	外 面	内 面		
第21図	5	柱穴	穴形	ヨコナデ	ヨコナデ	2.6	2.3	4.8	丸好	面積 7.5TR/4	面積 7.5TR/3	2種複合的	
"	6	"	"	"	"		4.4(里)	"	面積 7.5TR/4	面積 7.5TR/4	"		
"	7	"	"	横幅	"	12.4	4.0	5.9	"	面積 7.5TR/3	面積 5TR/3	"	
"	8	"	"	横幅	"	11.7	4.0	5.6	"	面積 5TR/3	面積 7.5TR/4	"	
"	9	"	高台	"	"		7.6	"	面積 5TR/4	面積 7.5TR/4	"	複雑な傾	
"	10	"	"	"	"		6.4	"	面積 7.5TR/4	面積 7.5TR/4	"	スズ付層	
"	11	"	鋼板	ヘラ面	"		"	"	面積 7.5TR/5	面積 10TR/3	"	内風土層	
"	12	"	小皿	ヨコナデ	ヨコナデ	9.3(里)	2.0	6.4(里)	"	面積 7.5TR/4	面積 7.5TR/4	2種複合的	
"	13	"	"	"	"		"	"	面積 7.5TR/2	面積 7.5TR/3	"		
"	14	"	"	底盤	ヨコナデ		2.0	"	"	面積 7.5TR/6	面積 7.5TR/6	"	糸切り底
第22図	1	"	穴形	ヨコナデ	"	10.5	2.0	6.1	"	面積 10TR/2	面積 10TR/2	"	
"	2	"	"	"	"	10.5	2.2	5.9	"	面積 10TR/4	面積 10TR/4	"	
"	3	"	"	"	"	10.5	1.8	6.1	"	面積 10TR/3	面積 10TR/3	"	
"	4	箱型	横幅	"	"	11.3	2.3	6.8	今や不良	面積 7.5TR/6	面積 7.5TR/6	風化著しい	

## ま　　と　　め

日 高 正 晴

このたび発掘調査した上宮第3遺跡は、古い由緒をもつ三宅神社の、すぐ後背地に所在しているので、特に、神社との関連で特殊遺構などの出現というようなことも考えられた。

調査結果は、予期した通り10本の溝状遺構、および10基の土坑、それに掘立柱の建物跡などが確認されたが、さらに関心がもたれたのは、5号溝状遺構と7号溝状遺構の間の平坦な基台面に、四列にわたり、柱穴列が横状につくられていたことである。また、この遺跡の全面にわたって約850個の柱穴状遺構が認められたことも、それなりに、この遺跡の意味する歴史性を示唆しているように思われる。

ところで、平成2年の9月から10月にかけて、同じく三宅神社の北、約100mの場所につき、事前調査を行った。そして調査の結果では、14本の溝状遺構と3ヶ所に長方形土坑が確認された。この両者の調査で相違していることは、今回の方が、柱穴状遺構などが極めて多く、また出土遺物も、土師器などを主として、かなり出土したことである。

それでは、ここで三宅神社の歴史につき、その概要を述べてみたい。まず、ご祭神は、天孫降臨伝承にゆかりのある天津彦火瓈々杵尊を奉祀してあるが、鎌倉時代初頭の建久8年に編集された『日向国図帳』には、「福野宮神田廿五町」とあるので、この神社の創建はかなり古い時代まで遡ると推定できる。

また、この三宅神社は、西都原古墳群内の象徴的墳墓としての男狭穂塚、女狭穂塚に対する祭祀行事を執り行ってきたので、その信仰儀礼は、特に、莊嚴なものであった。そのようなことからして、この神社の年間の祭典は97回に及んだとある。の中でも、6月夏至の天孫降臨祭、8月15日の国家安穩祭、それに10月1日と11月初卯の日の山陵祭は、中世期における三大祭といわれてきた。

ところで、郷土の先学、児玉實滿翁は、その著書、『笠狭大略記』の中で、この三宅神社一帯の地を「笠狭御崎」の本源地にあてている。

このような観点に立ってこの上宮第3遺跡を考察した場合、四列の長い柱列遺構の存在など、極めて祭祀儀礼的な遺構と考えられる。古くは、この遺跡のかなりの地域は、神社の境内に含まれていたものと思う。この柱列遺構には、ほとんど遺物は出土していないが、もし

かすると、多量の土師器を出土した1号土坑には、祭祀行事に使用した祭器としての土師器が、終了後に、この土坑内に入れられたものかもしれない。いずれにしても、この遺跡からの出土品は、大部分、土師器であるか、その中でも高台付土師器が比較的多かったのは、年に100回近い祭祀儀礼行事に使用された祭器としての土師器が、その後、この地に遺存したものと思われる。2軒現われた掘立柱の建物遺構にしても、恐らく、三宅神社に関連があるのではないかと思われる。なお、上宮遺跡（上宮2号遺跡）でも存在し、また、今回も発見された数多くの溝状遺構が、何の目的で掘込まれたのが、さらに検討してみる必要がある。ところで、この遺跡の年代であるか、主として、平安末期頃から中世期前半頃の祭祀遺跡とみることができるが、その場合、三宅神社の祭祀儀礼に関連するものとみなされる。

図 版



卷

図版 1



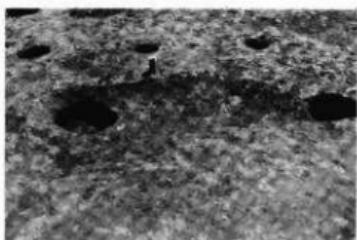
上宮第3遺跡近景



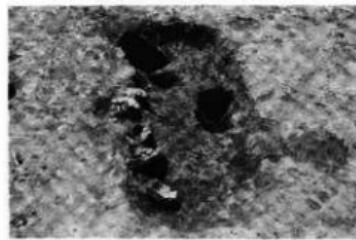
調査地南側遺構分布状況



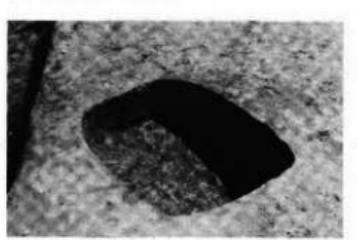
1号土坑遺物検出状況



1号土坑検出状況



2号土坑検出状況

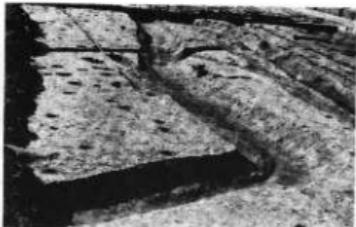


3号土坑検出状況

図版2



1号溝状遺構検出状況



2号溝状遺構検出状況



調査地北側遺構分布状況 (南東部より)



4号・5号溝状遺構内配石検出状況



5号溝状遺構土層検出状況



調査地北側遺構分布状況 (北西部より)



7号・8号溝状遺構検出状況

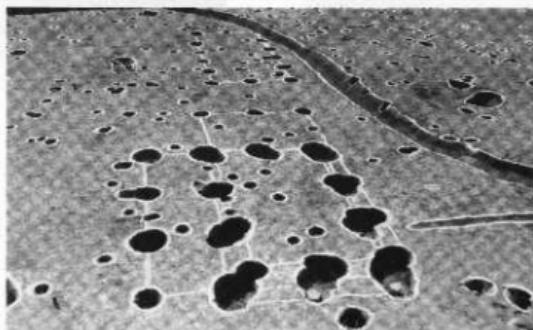
図版 3



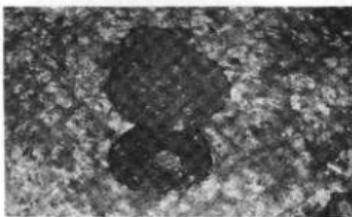
2号・9号・10号溝状遺構検出状況



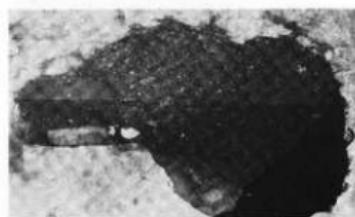
弥生時代住居跡検出状況



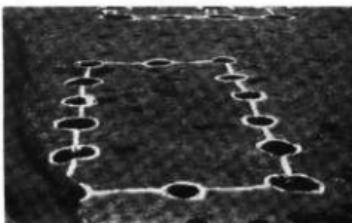
1号・2号掘立柱建物跡検出状況



1号掘立柱建物跡柱穴 (P12)



1号掘立柱建物跡柱穴 (P2) 検出状況



2号掘立柱建物跡検出状況



柱列 (網列) 状遺構検出状況

図版 4

弥生土器



①~④

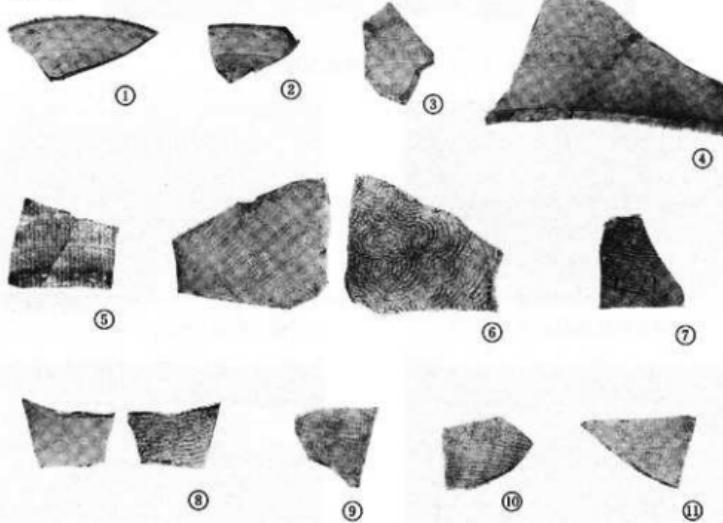


⑤



⑥

須恵器



図版 5

1号土坑



①～③



④～⑥



⑦～⑨



⑩～⑫



⑬～⑯



⑯～⑰



⑲～⑳



㉑～㉒



㉓～㉔



㉕～㉖



㉗



㉘・㉙

图版 6



⑯



⑰



⑱

2号土坑



⑲ · ⑳



㉑



㉒ · ㉓

1号溝状造構



①~④



⑤~⑦



⑧~⑪



⑫ · ⑬

2号溝状造構



⑭ · ⑮

3号溝状造構



⑯ · ⑰

图版 7

4号溝状遺構



⑯・⑯



㉑

5号溝状遺構



㉒～㉔

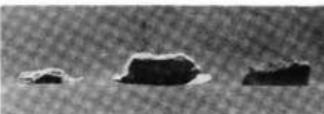


㉕～㉗

1号掘立柱建物跡



①～③



④～⑥

柱穴



①～③



④～⑥

土師器



⑦・⑧



①・②



③・④

---

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集

平成5年3月25日発行

---

編集発行 西都市教育委員会  
印刷所 なかむら印刷所

---

